

AN
安

YONG
龍

SOO
洙

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第99号
学位授与年月日	平成12年7月6日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 言語科学専攻
学位論文題目	韓・中日本語学習者の指示詞習得に関する研究 ——第二言語習得における母語と目標言語の影響関係をめぐって——
論文審査委員	(主査) 教授 才田 いずみ 教授 鈴木 淳子 教授 平野 日出征

論文内容の要旨

1 目的

本論文では、以下の5つを研究の目的として定め、韓国人学習者(以下、KLとする)と中国人学習者(以下、CLとする)の指示詞コソアの習得を通して「母語」と「目標言語」の関係や影響を探っていく。

目的1 KLとCLの指示詞コソアの習得において、母語の規則は関わっているのか、もし、母語の規則が関わっているなら、それはどのように関わっているのかを明らかにする。

目的2 KLとCLの指示詞コソアの習得において、日本語の規則はどのように関わっているのかを明らかにする。

目的3 KLとCLの指示詞コソアの習得における母語と日本語の関わり方を明らかにする。

目的4 KLとCLの指示詞コソアの習得において、初級、中級、上級という日本語のレベル(以下、レベルとする)による習得状況と、レベルが高くなるにつれて習得状況がどのように変化するのかを明らかにする。

目的5 KLとCLの指示詞コソアの習得において、一定の習得順序や規則性がみられるかどうかを明らかにする。

本研究では3項対立の指示体系の母語話者であるKLと2項対立の指示体系の母語話者であるCLを対象にする。異なる指示体系を母語とする学習者を調査対象とすることで、指示詞の習得への母語の規則の関わり方及び日本語の規則の関わり方、さらにその相互の関係が捉えやすくなるはずである。

第二言語学習者が目標言語の規則を習得する過程には「発達の道すじ (route of development)」と呼ばれる習得順序 (order of learning) が存在するといわれている。吉岡 (1999) には、「中間言語の段階研究では、英語、スペイン語などのデータにより、様々な試みがなされた。その結果、多くの場合一定の習得順序があること、授業などで教えられると習得は早く進むが、その順序は変わらないことがわかっている」(吉岡1999:20) とある。学習者の第二言語習得過程には一定の習得順序や規則性がみられるという研究結果は数多く報告されている (Dulay, H. and M. Burt (1974b)、小池 (1981)、Gundel, J. and E. Tarone (1983)、Johnston and Pienemann (1986)、迫田 (1996b)、安 (1996a)、八木 (1998) など)。本論文では、KLとCLの指示詞コアの習得においても一定の習得順序や規則性がみられるかどうかを合わせて検討する。

2 本研究の方針

一般に成人母語話者は、母語の文の文法性の適否を判断する際の目安となる言語能力を有しているといわれている。これに対し、学習者は目標言語を習得する過程にあり、その言語能力は母語話者の言語能力に近づいていく発達途上段階の能力とみなすことができる。そのため、本研究では、学習者の第二言語に関する使用能力 (学習・習得の程度) を測るに当たって能力が「あるか」「ないか」という二分法ではなく、「どの程度の能力を身につけているのか」という次元で考えることにした。

学習者の目標言語の使用能力の程度を正確に捉えるためには複数の機会を与えてその結果をみる必要がある。なぜならば、ある学習者に1回だけの使用の機会を与えて得られた結果では、その学習者の目標言語の使用能力の有無しか測れないからである。また、母語話者であれ学習者であれ人間は、明確な言語知識を持っていても集中力不足などによりいわゆる「mistake」をしてしまうことがある。その「mistake」による発話 (あるいはテストなどでの選択) は話者の言語知識を正しく反映していないことになる。本研究ではこのような問題に配慮し、複数の問題処理の機会 (本研究では原則的に3回) を与えた上で多数の被調査者 (初級、中級、上級の各レベル: 60名~180名程度) の解答率を算出するという手法をとった。仮に、「mistake」がデータに含まれる場合でも、全体の正用率、誤用率に与える影響を少なく押さえることができると考えたからである。

第二言語習得には、学習者を取り巻く教育環境やカリキュラムなどの問題、学習動機や言語学習能力などの個人差の問題が関わってくる場合がある。本研究ではこの問題に配慮し、複数の教育機関の学習者を調査の対象にした。

本研究では、学習者の目標言語の習得のあり方についてより幅広く捉えるために、指示詞習得に関する質問紙調査 (以下、「調査1」とする) に加えて、指示詞使用時に関する質問紙調査 (以下、「調査2」とする) も行なった。「調査2」は、(1)学習者自身が指示詞の使用に際して母語と日本語の関係をどのように捉えているのか、(2)学習者自身が自分の指示詞の使用をどのように捉えているのか、(3)指示詞の学習に対してどのように感じているのか、についての質問紙調査である。分析においては「調査1」から実際の習得状況を検討し、それに「調査2」の結果を交えて考察を行なうことで、学習者の指示詞の習得を多角的に捉えられるよう試みた。

3 論文の構成

本論文は、全体が9章で構成されている。第1章は序論、「第1部 先行研究及び本研究の方

針」(第2章～第4章)は、本研究の理論的な部分である。ここでは、第二言語習得研究の基本的な考え方や研究意義を紹介した。また、本研究の対象である指示詞の習得研究に関する先行研究の成果や課題を明確にした上で、研究の方法と調査の方針について述べた。第2章では第二言語習得に関する理論や日本語の習得研究の現状について、第3章では指示詞の先行研究について、それぞれ述べた。第3章では具体的に、(1)日本語の指示詞コソアの研究に関する代表的な理論、(2)日韓・日中の指示詞の対応関係、(3)日本語学習者の指示詞コソアの習得に関する先行研究、について紹介した。第4章では、本研究の方法について述べた。

「第2部 韓国人及び中国人学習者の指示詞習得」(第5章～第8章)は、本研究の結果と考察の部分である。第5章では、「調査2」の結果に基づき、KLとCLの指示詞使用時の実態について検討した。第6章～第8章は、指示詞習得に関する質問紙調査(「調査1」)の結果に基づき、KLとCLの指示詞の習得状況を探った。第6章は現場指示、第7章は非現場指示、第8章は複数使用可能な指示詞の結果と考察についてそれぞれ述べた。

「第9章 総合的考察」では、本研究の結果を総合的に考察し、今後の課題について述べた。

4 先行研究及び研究方法

日本語学習者の指示詞の習得に関する先行研究としては、申(1985)、酒井(1987)、迫田(1993, 1996a, 1996b, 1997a, 1997b, 1998)、安(1996a, 1996b, 1998)、上垣(1997)などが挙げられる。これらの先行研究においては、非現場指示コソアは日本語学習者の習得困難な学習項目としてよく取り上げられ、特にソとアの使い分けが習得困難であるといわれており、この点においてはほぼ意見が一致している。申(1985)、迫田(1996b, 1997b)、上垣(1997)、安(1996a, 1996b, 1998)などの先行研究は、非現場指示コソアの習得を母語の転移の観点から検討している。そのうち、申(1985)、安(1996a, 1996b, 1998)は、文脈指示のソ系とア系の使い分けは、韓国語の干渉を強く受けていると主張している。それに対して、迫田(1996b, 1997b)、上垣(1997)は、文脈指示のソ系とア系の使い分けにおける誤用は母語の違いにかかわらず、同様の誤用が存在しており、母語の転移に関しては否定的な見解を示している。しかし、これらの先行研究においては、学習者が生み出す誤用に母語の規則と日本語の規則がどのように関わっているのか、その誤用が学習が進むにつれてどのように変化するのかについて十分な検討が行なわれていない。そこで本研究では、KLとCLを対象に横断的方法を用いて調査を実施し、指示詞コソアの習得における「母語」と「目標言語」の関係や影響を明らかにしようとする。

調査は、(1)KLとCLを初級、中級、上級の3つのレベルに分けるための日本語能力テスト、(2)指示詞習得に関する質問紙調査(「調査1」)、(3)指示詞使用時に関する質問紙調査(「調査2」)、の3種類である。なお、単一の学習形態をとる日本語教育機関の学習者のみを対象にすると、その機関のカリキュラムに強く影響を受け、広く習得のあり方を探ることは難しい。よって被調査者は、特定のカリキュラムの影響を受けぬよう、KLは韓国の8つの日本語教育機関、CLは中国の6つの日本語教育機関から得た。

5 研究結果及び今後の課題

5.1 「調査1」と「調査2」の結果

この節では、本研究で行なった「調査1」(第6章～第8章)と「調査2」(第5章)に関する結果を述べてから、次節で総合的な考察を行なう。

第5章では、「調査2」の結果に基づき、KLとCLの指示詞使用時に関する行動や意識を探った。KLとCLは、学習者の母語と日本語との相違点を指示詞コソアの学習を難しくする要因として捉えている学習者が多い。具体的には、KLにとっては日韓両言語の部分的な相違が、CLにとっては日中両言語の体系の違いが、それぞれ学習を難しくする要因として働いているようである。これは学習者の母語と目標言語との対応関係が指示詞コソアの習得に強く関わっていることを示唆する。また、実際の指示詞コソアの運用においては、持っている知識から推測したり、先に覚えた基本的な用法を応用したりする傾向が強い。さらに自信のない部分に関しては、使用を止めたり、指示詞を他の表現に変えてしまう傾向も強いことが明らかになった。

第6章～第8章では、「調査1」の結果に基づき、KLとCLの指示詞コソアの習得状況をみた。第6章と第7章で取り扱う指示詞は、コソアのうち正用が1つとなるものである。このような指示詞について、正用と誤用の観点からKLとCLの特徴を探った。第8章で取り扱う指示詞は、正答が複数可能な指示詞である。

「第6章」では、KLとCLの現場指示の習得状況をみた。その結果、独立的現場指示のア系において、特にCLは中国語からの影響と日本語からの影響を同時に受けることによって習得が非常に困難な場合があることが示された。その一方で、母語の指示体系が異なるKLとCLが話を切り出した側からの指示に対して答える側からの指示（以下、「答指」とする）の場合はソ系で指し示そうとする傾向が強いことがわかった。そして、KLとCLの相対的現場指示の対立型の習得においては、特にKLにおいて韓国語と日本語が1対1の対応関係にあるにもかかわらず、ソ系は上級になっても使用上の問題が残ることがわかった。これは学習者の母語と目標言語が類似していても、それが必ずしも「習得の容易さ」につながらない場合があることを示唆する。また、KLとCLは相対的現場指示の対立型の使用においては、母語の違いに関係なく、共通して、コ系の答指をソ系で指し示す傾向があること、ソ系で指示すべき対象について単に自分にとって遠い対象を指すア系で処理する傾向があることが明らかになった。

「第7章」では、KLとCLの非現場指示の習得状況をみた。その結果、KL、CLともにソとアの違いが困難であることがわかった。これは、申（1985）、迫田（1996b, 1997b）、上垣（1997）、安（1996a, 1996b, 1998）の結果と一致する。しかし、レベルによる誤用の種類と誤用率にはKL/CL間に顕著な差がみられる部分があった。特にKLは初級、中級レベルでアをソとする誤用が非常に多い。しかし、ソをアとする誤用が習得が進むにつれて逆に高くなる。このことは、KLが初級段階で韓国語の益系（ソ系）の干渉を特に強く受けるが、学習が進み日本語のア系を学習し、韓国語と日本語の指示体系の相違点に気づき、ソよりアを優先しようとする使用意識の変化によるものであると解釈される。これに対して、CLは全体的にレベルによる変化が少ない。これは中国語には日本語のソ系に当たる指示体系が存在しないため、日本語のソの概念が定着しにくく、コソア相互間の交替が起きにくいことによるものであると推測される。

「第8章」では、KLとCLの「複数使用可能な指示詞」の習得状況をみた。「複数使用可能な指示詞」は単純な正用率・誤用率の算出はできない。よって、第8章ではKLとCLが、(1)使用が可能なものとして何を選んだかの率（以下、「使可比」とする）、(2)(1)で選んだもののうち最も適当な用法としては何を選んだかの率（以下、「最適比」とする）、の2点に焦点を当てた。その結果、KL/CL間の使用傾向に顕著な差があり、それが初級で特に顕著であることがわかった。CLは、「複数使用可能な指示詞」においても第7章の結果同様、レベルによる変化がほと

んどみられなかった。これに対し、KLは初級で「使可比」「最適比」とともにソ系が高いが、学習が進むにつれてア系／ソア系が高くなるという結果が得られた。このことはKLは初級では、母語に頼っているが、学習が進むにつれてその意識が弱くなることを示している。この結果から、学習の初期段階においては母語（KLの韓国語）の規則を日本語に当てはめる傾向が強いが、学習が進むにつれてその傾向は弱くなると考えられる。

5.2 総合的考察

本研究の結果を冒頭に示した研究の目的に沿って総括的に要約する。

「目的1」の母語の影響の有無については、まず「調査2」の結果から、KL、CLともに指示詞コソアを使用するときには学習者の母語を日本語に当てはめる意識が窺える。しかし、母語を当てはめる程度についてはKL/CL間で違いをみせており、KLの初級で特にその傾向が強い。日韓、日中の対応関係からKLとCLの指示詞の習得をみた場合には、「学習者の母語と日本語が1対1に対応する用法」>「学習者の母語と日本語に「ずれ」がある用法」の順に習得されることがわかった。安（印刷中）のKLとCLの漢語の習得においても、母語と日本語が1対1に対応する文脈でもKL、CLともに母語に存在する漢語をそのまま日本語に持ち込むのを避けるという結果が得られている。このように学習者の母語と目標言語が類似しているからといって、それが直接「正用率の高さ」に結びつくというわけではないことが明らかになった。

「目的2」は、KLとCLの指示詞コソアの習得に日本語はどのように影響するのかを調べることであった。これに関しては、「調査1」により、KLとCLが生み出す誤用や使用上の特徴には、KLとCLが同様の傾向をみせている部分も存在することが示された。この結果は、第二言語習得過程には母語の違いを超えた誤用や習得上の特徴が存在することを示唆するものである。

「調査2」からは、KL、CLともに日本語コソアを使い分ける時には、日本語の指示詞の基本的な用法を当てはめたり、知っている日本語の指示詞の知識から推測する傾向がかなり強いことがわかった。このことには、KLとCLともに新しく学んだ目標言語（日本語）を積極的に利用しようとする意識が窺え、習得の過程において目標言語の規則を間違えたり、学習者特有の不完全な知識が形成されると考えられる。

「目的3」は、KLとCLの指示詞コソアの習得に母語の規則と日本語の規則がどのように関わっているのかを明らかにすることであり、「目的4」は初級、中級、上級とレベルが高くなるにつれてKLとCLの習得状況がどのように変化するのかを明らかにすることであった。KLに関しては「調査1」の結果、レベルによる変化がはっきり現れた。しかし、CLに関しては、非現場指示において学習が進むにつれてコ系の誤用が少なくなること以外は、レベルによる目立った変化はみられなかった。KLは、学習が進むにつれて、（非現場指示の）韓国語の益系（ソ系）が日本語ではソ系とア系に分かれることに気づき、ルールの組み替えを行なっていると考えられる。このKLの使用ルールの組み替えから、「韓国語の影響を比較的強く受ける学習の初期段階」と「学習が進み日本語の指示詞の新しい用法を学習し、日本語と韓国語の両方の影響を受け両者の影響が交じり合っている段階」が存在することが示唆される。

「目的5」は、KLとCLの指示詞コソアの習得に一定の習得順序がみられるかどうかについて検討することであった。本研究の結果から、KLとCLが同様の習得順序をみせている部分とKLとCLが異なる習得順序をみせている部分があることが明らかになった。この結果は母語における指示体系が異なるKLとCLが同様の習得順序をたどる部分が存在する一方、KL/CL間で習

得順序に相違をみせている部分も存在することがわかった。

本研究の最終的な課題は、「目的1」～「目的5」を達成することを通して第二言語習得における母語と目標言語の影響関係を明らかにすることである。そのためには、KLとCLの指示詞コソアの習得における相違点や類似点を明らかにする必要がある。

KLとCLの類似点としては、「日本語の規則を誤ることによる誤用」や「KLとCLが同様の習得順序を示している部分」の存在が確認された。一方、KLとCLの相違点として以下のことが挙げられる。現場指示のKLとCLの相違点として、(1)「独立的現場指示のア系」の使用において、CLは遠近の捉え方に関する母語の影響によって習得が極めて困難な場合があること、(2)現場指示の「答指」において、KLとCLは母語の違いにかかわらずソ系で指し示す傾向がある一方で、KLはコ系をソ系とする傾向が強いのにに対して、CLはア系をソ系にする傾向が強いという違いも同時に存在すること、3)現場指示全体を習得難易度別に整理すると、KLは「コ系 \geq ア系 $>$ ソ系」、CLは「コ系 $>$ ソ系 \geq ア系」になっていることから、KLはソ系（相対的現場指示）、CLはア系（独立的現場指示）が最も習得困難であることが挙げられる。また、非現場指示及び複数使用可能な指示詞においては、(1)KLは学習の初期段階でソ系（母語によるソ系）の使用傾向が強いが、学習が進むにつれて「ソ系からア系/ソア系への組み替え」が行なわれてるのに対して、CLはレベルが高くなっても非現場指示の使用傾向があまり変化せず、正用率も高くないこと、(2)コ系の誤用に関しては、KL、CLともに学習が進むにつれて次第に少なくなるが、誤用の消滅の早さ（あるいは消滅の時期）に関しては総じてKLのほうが早く、学習が進んだ中級、上級（特に上級）においては、KLよりCLのほうがコ系の誤用が消滅しにくいこと、などが挙げられる。以上、KLとCLを比較した場合、KLはレベルによって使用傾向に変化をみせているのに対して、CLは初級から上級まで使用傾向に変化がほとんどみられないことが最も特徴的な点である。

特に、上級での誤用の傾向が似ていることは学習者の言語体系を判断する上で重要な鍵となる。先行研究の申（1985）、迫田（1996b, 1997b）、上垣（1997）、安（1996a, 1996b, 1998）などでの、学習が進んだ段階（特に上級）における誤用の原因についての解釈の違いに関わる問題とも深い関係がある。申（1985）、安（1996a, 1996b, 1998）では、KLの非現場指示（文脈指示）のソ系とア系の使い分けにおいては韓国語の干渉を受けるとしているのに対し、迫田（1996b, 1997b）、上垣（1997）では、文脈指示のソ系とア系の使い分けにおける誤用は、母語の違いにかかわらず同様の誤用が存在するとしており、母語の転移に関しては否定的な見解を示している。

しかし、学習過程の一時点における誤用の傾向が似ていることをもって、誤用を生み出す原因が同じであると判断することには疑問が残る。むしろ、学習過程の一時点における誤用の傾向が似ていても、その前後の過程が異なっているならば、その時点における誤用の原因は異なっていると考えられるべきであろう。なぜならば、第二言語学習者は、目標言語の新しい規則を習得するという共通の目標を持っていても既に身につけている母語が異なるため、それぞれ異なる学習経験をすると考えられるからである。ある一時点で母語の違いにかかわらず同様の誤用が観察されたとしても、それは学習者それぞれが持つ互いに異なる学習経験の一部に過ぎないのであり、その誤用だけで、学習者の言語が母語の違いを超えて同じであると断定してはならない。

本研究の調査においても中級、上級（特に上級）レベルにおいてはKL/CL間で、誤用率、正

用率（第7章）あるいは「使可比」「最適比」（第8章）に差がなくなるか、差が縮まる部分が多くみられた。しかし、KLはレベルによって使用傾向に変化をみせているのに対して、CLは初級から上級まで使用傾向に変化がほとんどみられなかった。このことは、学習が進んだ段階（特に上級）でKLとCLが生み出す誤用の傾向は似ていても、両者の言語体系はかなり異なる可能性が高いことを示している。

以上の結果は、学習者の言語体系は「母語」と「目標言語」の両方の影響を受けて形成されるものであり、第二言語学習者の言語は各母語話者特有の体系をなしていることを示している。

6 今後の課題

本論文では、KLとCLの指示詞の習得について横断的に研究を行なうことで、KLとCLの指示詞の習得における特徴や問題点について、(1)学習者の母語の違いにかかわらず同様の使用上の特徴が存在すること、(2)KLは学習段階に極めて規則的に変化するのに対し、CLは学習が進んでも使用上の変化があまり現れないこと、(3)KLとCLの指示詞コソアの習得において一定の習得順序や規則性が観察されたことなど、いくつかの点が明らかになった。しかし、本研究の結果は「学習者の言語体系」の一側面に過ぎず、「学習者言語の全体像の解明」とは程遠いものである。以下に、今後の課題についてまとめる。

第一に、CLの学習段階による変化に関する問題である。本研究の結果、CLに関しては学習が進むにつれて非現場指示のコソアの誤用が緩やかに減少すること以外は、学習段階による変化を捉えることができなかった。今後、超上級のCLや中国人日本語教師などについても調査研究を重ねて、この問題についてさらに議論する必要があると思われる。

第二に、学習環境及びカリキュラムの問題である。本研究では、被調査者の選定に当たって、特定のカリキュラムの影響を受けぬよう、KLについては韓国の8つの日本語教育機関、CLについては中国の6つの日本語教育機関の学習者を対象にした。そのため、特定のカリキュラムや教授法が指示詞コソアの習得にどのように影響しているのかについては検討していない。日本語教育現場への貢献を考えれば、学習者の指示詞の習得がカリキュラムのあり方の影響を受けているかどうかについて検討し、もし影響を受けている場合、それはどのような形で習得に影響するのかについても検討する必要があるだろう。

第三に、習得に関わる要因に関する問題である。本研究で採用した「調査2」は、研究者があらかじめ用意した質問項目に強制的に反応させるという質問紙法の形式をとっているため、質問項目以外の習得に関わる要因に関しては検討していない。今後、今回の研究で扱っている項目以外の要因も探るとともに、それらの要因について学習者自身はどのように捉えているのかについても検討する必要があるだろう。

第四に、指示詞以外の学習項目についての検討の問題である。本研究では、指示詞を学習者の母語と日本語との対応関係に基づき、「1対1の対応関係にあるもの」と「学習者の母語と日本語の間で「ずれ」があるもの」に分けて検討した。しかし、例えば、談話レベルの学習項目においては、学習者の母語と日本語の対応について、指示詞のような二分法だけでは説明ができないものも多いと予想される。また、場合によっては、学習者の母語と日本語に対応がない（例 動詞や形容詞の活用）、つまり日本語でしかみられない言語的特徴が学習項目となることもある。このような母語と目標言語に対応がない学習項目を学習者がどのように習得しているのかについても検討していく必要があるだろう。

論文審査結果の要旨

本論文は、韓国語・中国語を母語とする日本語学習者を対象に、日本語の指示詞コソアがどのように習得されるかについて、特に母語の影響を中心に据えて解明を試みたものである。全部で9章から成る本論文は、第1部「先行研究および本研究の方針」に3章、第2部「韓国人および中国人学習者の指示詞習得」に4章を充て、はじめと終わりに第1章「序論」と第9章「総合的考察」を配している。

第1章「序論」では、研究の動機・目的と論文の構成について記している。論者の韓国人日本語学習者としての経験を交えながら、日本語の指示詞コソアの習得に迫る方針として、母語の影響、日本語の規則の影響、母語と日本語の影響の相互関係、学習者の日本語レベルによる変化、指示詞の習得順序や規則性という5つのポイントが挙げられている。

第1部「先行研究および本研究の方針」では、まず、第2章「第二言語習得理論の概観」で、対照分析、誤用分析、中間言語研究の3つの理論を検討することで第二言語習得研究の流れを示すと同時に、日本語についての習得研究を分野別にまとめ、対照分析、誤用分析、中間言語研究のそれぞれの長所を取り入れる本論文の立場を明らかにしている。

第3章では、特に指示詞に関する先行研究に絞って検討する。日本語学における指示詞研究を辿った上で、本論文が採用する宋晩翼による分類とその日韓対照分析について詳述し、さらに宋の分類に基づいて日中指示詞の対応関係を検討している。次に、これまでの日本語指示詞習得の研究について批判的に検討し、母語の影響と母語以外の影響による誤用の区別、学習者の使用意識の検討など、4つの課題を設定する。

第4章「研究方法」では、この課題を遂行するために、指示詞コソアの習得に関する質問紙調査（調査1）と指示詞使用時の学習者の意識や態度などに関する質問紙調査（調査2）を行うことを述べ、それぞれの質問紙の構成と被調査者に関する情報、および結果の分析方法について記す。

第2部「韓国人および中国人学習者の指示詞習得」では、調査の結果が示され考察が行われる。

第5章「指示詞使用時にみられる特徴」では、学習者の指示詞使用時に関する行動や意識について「調査2」に基づいて論じている。その結果、韓国人学習者については、母語を日本語に当てはめる傾向が強いけれども、日韓に類似点があるから指示詞習得は容易であると考える者が比較的少ないこと、日本語レベルが上がるにつれて日韓両言語の相違点が習得の邪魔になると感じる者が増加することがわかった。一方、中国人学習者は、韓国人の6～7割が自分なりの使用基準を持っているのに対して、自分なりの使用基準を持つ者がどのレベルでも半数以下しかなく、日中の相違点が学習の難しさに繋がると感じている者が比較的多い。双方の学習者とも、実際の指示詞の運用に際しては、既有知識からの推測や先に覚えた基本的な用法を応用する傾向が強く、自信のない部分に関しては、使用を止めたり他の表現に変えたりする傾向も強いことがわかった。

指示詞の使用に関して、以上のような意識を持ち行動を取る韓・中の学習者が、個々の用法についてどのような習得状況を見せているかについては、「調査1」の結果を記し考察を行う第6章から第8章にかけて詳述されている。第6章は、指示対象が話し手と聞き手の目に見える場に存在する「現場指示」に関する用法を、第7章は「非現場指示」の用法を、そして第8

章は、使用する者の解釈のあり方により複数の指示詞の使用が可能な状況について扱っている。

この3つの章には、多くの興味深い指摘が見られる。「相対的現場指示の対立型」の用法で、話を切り出すときよりも、承ける場合において指示詞の正用率が有意に低くなる傾向があること等もその一例である。これは、現場指示の場面であるのに、相手が言及したものという意識が働いてソに引かれるためではないかと解釈されているが、母語の違いを超えて見られる誤用として、第二言語学習者に共通の指示詞習得プロセスを示唆していると考えられる。

第9章「総合的考察」では、6、7、8章で個々の用法別に細かく見てきた結果をまとめ、第1章「序論」に示した5つの観点から、再度結果を捉え直している。そして、全体を見渡した場合、韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者の間には、部分的に共通性も見られるが、例えば、現場指示で韓国人はコ系をソ系とする傾向が強いのにに対し、中国人学習者はア系をソ系とする傾向が強いこと、非現場指示で、韓国人学習者の選択傾向が上級になるにつれてソからアへと変化していくのに対し、中国人の場合はレベルによる使用傾向にあまり変化がないこと、コ系の誤用については、韓国人学習者よりも消滅しにくいことなど、総合的にはかなり異なっていることを明らかにしている。

本研究で採用した宋晩翼による指示詞分類が大変細かいため、大局的な傾向が把握しにくい結果になった点には、多少の不満もなしとはしないが、合計700名以上の学習者データを着実に分析し、統計的に有意な点に絞って細かく考察していく手法にはけれん味がなく、横断的研究として充分評価に価する。本研究は、縦断的研究を含むこれまでの指示詞習得研究を補い、精緻化するものとして、日本語の第二言語習得研究全体に貢献するところが大きい。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。